慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	美術の都(澤木四方吉著, 東光閣書店發行)
Sub Title	
Author	松本, 芳夫(Matsumoto, Yoshio)
Publisher	三田史学会
Publication year	1926
Jtitle	史学 Vol.5, No.3 (1926. 7) ,p.151(457)- 152(458)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	書評
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19260700-0152

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

紫波郡昔話（佐々木喜善著　鄕土研究社發行）
津輕舊事談（中道等著　鄕土研究社發行）

兩書とも爐邊叢書中の最近刊書である。紫波郡昔話は奥州における昔話採集者として有名なる佐々木氏の編著であつて、氏が紫波郡の人小笠原氏より報告されたる二百七篇の中から、『口碑傳說の部類に入れるのがよいと思はれるもの、其他此集の他の譚と著しく重複したものや、又は其斷片かと思はれて、さう價値の有りさうにも思はれぬものやは除き、この百十五篇だけを輯め』られたのである。ところがこの百十五篇の昔話は、どれもこれも誠に面白いもので、中には吾々の幼時誰かに聞いて、かすかに記憶の底に殘つてゐたものを再び想起させるものがあつて、一層のなつかしさを覺える。そこには繼子の成功と繼母の失敗の話がある。和尙の愚と小僧の賢の話がある。慾の失敗の話がある。あわてものの話、馬鹿聟の話、動物にからまる話がある。炭燒長者の話や三輪山傳說に類する話がある。かくのごときたわいない、面白い話、老媼がかあい孫達にきかせた、さうして大人となつて殆ど忘れてしまう話、この單なる昔話にも、しかしながら人間生活の大きな敎訓と事實とあることを忘れてはならない。

津輕舊事談は、本土の北端、東西南北中津輕の五郡における傳說や民俗二十篇を口碑と記錄とによつて收錄したものであつて、その傳說の中に田村麿將軍が度々出てくるのも特色であり、また外ヶ濱の荻の話などもこの地において始めて聞かれ得るものである。兩書ともに北方文明の研究に重要なる資料を供するものであつて、今日一般文化の點において比較的後れたるこの地方が、吾吾の新しい學問によつて開拓されてゆくのはまことに喜ばしいことである。（松本芳夫）

美術の都（澤木四方吉著　東光閣書店發行）

本書は大正六年秋第一版を公にして、すでに江湖の歡迎をうけたのであるが、今般更に增補改版して刊行されたものである。その序文におけるがごとく、本書の內容はヨーロッパにおける『美術若くは美術の人及び都會を主題としたる印象、批評、紀行、紹介等である。』けれども著者は美術史家としてすでに令名ある學者であるから、その所見は單なる旅人の淺薄なる印象や無責任なる批評と異なり、簡潔なる叙述のうちにも豐富なる示唆と卓拔なる批評と適確なる論斷とがふくまれ、讀者をして西洋美術史に對し正當なる見解をいだかしめ、一の鑑賞の指針を供するのである。『花の都』は近世紀文化の花が最初にその蕾を破つて、艷麗その妍を競つたフロオレンスの訪問記であつて、新藝術の先驅者ジオットを始めとして、ブルネレヌコ、ドナテロ、マサッチオ、ボテチェルク、及びミケランジェロ等のルネサンスの巨匠の遺作についての觀察記であり、その他『伊太利亞の旅』、『羅馬の秋』、『美術の都』、『巴里にて』、及び『ミュンヘンの憶出』等はヨーロッパの古美術市についての印象、批評、或はその追憶であつて、挿入されたる多くの鮮明なる寫眞版もまた讀者の理解を助くるに十分である。し

かしながら本書は單に古美術の行脚にとどまるのではなく、カンディンスキイの如き近代畫家についての紹介があり、また附錄として立體派及び未來派の發生の經路とその價値とについての極めて剴切なる論評がある。要するに本書は西洋美術史に興味を有するものの必讀の書であるとともに、また趣味の書としてもひろく江湖に推奬したい。（松本芳夫）

蓮如上人傳の研究（佐佐木芳雄著　中外出版社發行）

これ迄の蓮如上人傳の多くは上人を偶像化し過ぎてゐるから、嚴密な史實の上から評すれば、餘程の割引を以てみなければならなかつた。然るに本書は龍谷大學新進の篤學者佐々木芳雄氏が、その專攻されたる近代の史學を基礎として著されたものであるから、普通偉人傳に有り勝な奇怪な臆說や、神聖にしようとする虛構の僞說が無く、確實な資料に據つて述べられて居るから、終りまで氣持よく讀了した。たゞ慾をいへば、二三の點に於て、もう少し分り易く思ふ所があつた。一例を擧げると、

「東西本願寺門跡中にも、閨門を亂したるもの出でたるは、端を蓮如に發す」とまで惡評をさるゝ位、上人非難の焦點は閨門の關係であるが、佐々木氏は此點（第十章子女及び門弟）に於ては、辯護もしなければ、勿論非難のする筈はないが、叙述をもう少し詳しくしてくれたらと思ふのである。例へば

如了夫人――順如、如慶
蓮祐夫人――實如、妙宗
〃　〃
〃　〃　（二四七頁參照）

と記せる所のみを以て見れば、正夫人は何人か、將又順如は何男か、何女が不明である。そして此等の夫人等の生沒及び婚姻の年月日が不明であるから、後頁の記事を參照するときには甚だ不便であつた。殊に二五〇頁には「如了の第三、蓮乘云々」とあり、二五一頁には「蓮如の第五子、蓮綱云々」とあり、二五九頁には「第十一子如空云々」とあり、二六八頁には「蓮能の第一子、蓮如の第十一子妙祐云々」とありて、蓮如の何男或は何女であるかは、甚だ了解しにくいのであつた。蓋し此の如き記事は蓮如の何男某（如了夫人何男）といふ樣に記載してあれば、讀者にとつては洵に好都合である。

これは問題にする程の事ではなからうが、佐々木氏の資料引用の範圍は西本願寺方に厚くして、東本願寺方に薄しきは止むなき事とは云ひながら、此方面から多少の文句が付けられさうに感じられた。

尙挿入の寫眞版を今少し鮮明にして、且つ數葉の增加を希望したかつた。殊に上人の影像に就ては此感を深くした。

以上の次第であるが、本書は足利末期の世相を研究する者には洵に好資料であるから、蓮如上人崇拜家以外の人でも是非一本架藏されんことを望む。妄批多謝（國分生）